

ふ所、數百尺の土を仰望くと、天空に一橋の架してあるのを見る。これぞ名けて相生橋と云ふのである。確かに都人士の目を驚かすに足りる奇觀である。こゝから右折して約五町湯島温泉がある。

(二) 湯 島 温 泉

(1) 交通・泉質

湯宿から一里、馬車の便もあり、歩くにも面白い道である。このあたり、湯宿・湯島・法師と珠々繋ぎにあり、何れもかくれたる靈泉である。泉質は湯宿と相似て鹽類泉で、湧出量は仲々に豊富である。無色透明な、きれいな湯で、婦人など時々私かに自分な

がら顔を赤らむることがあるといふ位である。

脚氣・胃腸病・婦人病等に特效がある。

(2) 旅 館

旅館は三軒、一圓五十錢から二圓五十錢位で立派に居られる。設備等は完備とは云へないが、不便なだけ、悠々自然の大氣にびつたり浸ることが出来る。眞に静養若しくは勉強でもするには、却つて宜からう。近來、湯宿・湯島・法師には休暇を靜かに勉強に過すために入り来る東都の學生が可なりに多いのは、これが爲であらう。

全く二三日宛この三温泉を廻り歩いたら、仙境に遊ぶ心地がして、濁つた俗氣を遺憾なく洗ひ落した感じがする。

(三) 法師温泉

(1) 交 通

法師温泉がある。「國を出る時涙で出たが……」と雪の越路通ひの旅愁をそよる三國峠は、直ぐ眼の前にそより立つてゐる。下には潺湲たる法師川の流があり、眞に深山幽谷の趣のある所である。昨年か御料林局の林道が開かれたので、乗合馬車の便が出来た。湯宿から一圓、歩くのも趣が深い。馬に乗るも亦面白い。

(2) 効能・旅館

温泉は無色透明の清泉で、硫酸カルシウムを多分に

含有し、胃腸病・婦人病・皮膚病等に特効がある。昔弘法大師が上州から越後へ巡錫の折に発見したものと傳へられて、法師の名によつて靈顯を固く信じたものか、事實温泉に靈能の多かつた爲か、不便の地に似ず古くから浴客の數が多かつた。近來は又三國峠の幽邃に惚れて來り滞在し、大自然の神秘を思ふ存分探らんとするの士が増して、一軒の旅館は盛夏の候など常に溢るゝばかりである。一泊二圓内外で、滞在の場合には一圓四十錢位で居られる。

(3) 三國峠の幽邃

法師温泉の特色は、天然風呂と幽邃なる深山の地であることであらう。浴槽は岩石で作られてゐる、所謂天然風呂で、その原始的の趣は、天下温泉多しと雖比類はあるまい。婦人など入

れば、恥しい程透明な清泉で、温度もよく、一浴すれば水晶の如き飛沫が飛ぶ。

法師川の美しい流の岩間々々に、河鹿が銀鈴を振るやうに切りなく鳴くのもたまらなくよいが、上越國境の大森林帯に、残月の淡くかゝる頃、幽鳥の佛法僧と鳴くのも弘法大師と縁ありさうで、寂滅といつた様な気分が起つてたまらなく淋しくなるのも亦趣深いものである。暗夜に一聲血を吐く裂帛の音の、遊子の魂切らすほととぎすも仙境の景物であり、黎明の雲海の變化も、高山地帯特有の観物であらう。海拔四千尺の三國峠のいたゞき、又このあたり百間瀧、大磐若塚の古戦場、十八町下りの奇勝等見るべきものが多い。都會文明にのみ

(四) 川 場 温 泉

眩まされて居る人士が、一度この神秘境に足を踏み入れんか、忽ちにして汚濁の空氣、黄塵萬丈の厭はしきを知り、大自然の幽邃がたまらなく嬉しくなるであらう。

(1) 川 場 温 泉

再び沼田へ歸つて、薄根川傳ひに登ること三里、川場温泉がある。俵二圓五十錢、馬車一圓五十錢で行ける。旅館は一軒宿泊料は一圓五十錢から二圓位である。湯は脚氣・リウマチス・神経痛・腦溢血・火傷等に特效があつて、極めて微温い。三十分から一時間、

永きは二時間位悠々と入つて居られる。湯桁を枕にして長々と足さし伸して眠ることさへ出来る。これがこの湯の面白い所である。然も脚氣に最もよいとされて居り、病氣の性質上客はかくして永く滞在する。これを微温湯生活と云つてこよなく喜んで居る。

(2) 附近の名勝

此處の後に聳える二高峯、右は海拔七千尺の武尊山、昔はこゝへ登ると三年を出でずして死ぬと言はれて登る者はなかつた峻嶺である。

左は迦葉山、山腹に曹洞宗の靈場、龍華院彌勒寺の禪刹がある。禪の公案でも難透とされて居る「拈華、微笑」の則に出て来る佛陀十六弟子の上行第一座、摩訶迦葉尊者の堂がある。今は曹洞宗だが、開基

は天台宗慈覺大師、外史でお馴染の平氏の祖一品葛原親王の令旨を奉じての開山と言ふ。法燈輝き繼ぐこと一千餘年、堂塔迦藍美事に、登山者四時絶えないに拘らず、極めて幽境で、佛法僧や慈悲心鳥が鳴く。

(は) 東入り諸湯

沼田から右へ赤城の麓を岩代境へ登るのは、東入り片品川の谷である。上州からの會津街道で、戊辰の役には、鳥毛の兜に、マンテル、ダンブクロ、重代の業物を纏に背負つた官軍の一隊が、肩に錦片を輝かして、白虎隊で名高い鶴の火の手を揚げに陸續と上つたのであつた。この街道にも、老神・穴原・小川等の温泉がある。

赤城の眞の美しさは、此方面から見ればきだど大町桂月氏は言つたが、溪流

の景觀として珍らしく宏大である。沼田を出でて一里、沼田町水道の淨水池、東京電燈の貯水池がある。この邊より風光漸く明眉となつて来る。片品川の溪流に沿ふ上久屋、美人の郷、糸の瀬の部落は一眸の中にあつて、仰げば雄大な赤城を望むことが出来る。鹽原多助愛馬別れの松を左に見て、行くこそ暫くにして高平に着く。

高平から一里、千仞の崖栗生峠を越すのは可なりの冒險であるが、蟬時雨の中を自動車に揺られて行くのはたまらなくよい。峠の頂上まで行くと、脚下を雲煙がこめて、沼田の市街が箱庭のやうに見える。長い隧道をくぐり出ると峠の茶屋がある。これから下り一里で老神温泉につく。

(一) 老神温泉

(1) 交通 沼田から四里、自動車馬車の便がある。

自動車 沼田驛前より二圓五十錢(一日四回)
馬車 同 二圓

(2) 効能旅館 温泉は溪流に沿うた岩壺から滾々と湧き出して、溪

谷美は鹽原温泉を凌駕する程のものである。景趣の變化の著しいのを喜んで、東都から盛に畫人が入り、緑陰の幽寂境を頻りに彩筆の技に争うてゐる。

湯は三ヶ所にあつて、上の湯・下の湯・新湯と云つてゐる。草津に匹敵する効能を有つ硫黄泉で、皮膚病一切・潰瘍・慢性リウマチス等に特效があるのであるが、未だ都人士には知られてゐない。旅館は株式会社組織で、設備收容力等可なりのもので、宿泊料は一圓五十錢乃至三圓位である。

(3) 附近に名勝

が仲々多い。對岸には寸白症・婦人病に利く穴原温泉があり、北へ一里片品川の奔流に千歳の奇橋がある。又大町桂月氏の名筆、關東の山水に依つて天下に知られた阪東無双の奇瀑、吹割の瀧は、千歳橋から五六町で、龍宮から年毎に椀を借りた怪奇な傳説がある。浮島の奇勝もこのあたりで、尙溪谷の美を探りつゝ三里上れば

上毛第一の大瀑、電光形に三段に落ちて直下三十丈の圓覺の瀧もあり、一日一勝をあさつても數日の滞在は敢て倦怠を感じない。

(二) 國立公園候補地

國立公園の候補地として、世に喧傳せられてゐる尾瀬沼、日本で珍らしい連珠状湖として知られてゐる菅沼を探らんとせば、この道を上らねばならぬのである。(菅沼尾瀬沼の記事は山崎晴治氏の上毛山水志による所多い)

(1) 菅 沼

追貝の千歳橋を渡つて、會津街道を東へ三里、片品小學校の角から右に折れ小川の溪流に沿うて上り、東小川村を過ぎる

と、一里にして白根温泉がある。温泉宿二軒、谷間で展望は少しもないが、溪流の音はゆかしい。

こゝから険しい道を二里上ると、一の瀬の狭谷があり、やがて大森林に入り、又小川の溪流に近づくると大尻沼から流れ出る大瀧川に達する。水の落口の橋を渡ると、大尻沼の北岸に出る。この沼は晝尙暗き大森林中であつて、水は黒味を帯び、水際には水草が茂つて、凄味の満ちてゐる沼である。これから半里上ると、沼合橋が架つてゐて、道が二ツに分れてゐる。向は丸沼で、右して橋を渡り、丸沼を左に見て山中を行くと菅沼が左下に見え、一里上ると金精峠で、之を上つて下れば栃木縣で、下は湯本に中禪寺である。丸沼は海拔一六五〇米で、

菅沼より百三米低い。楕圓形で、面積約廿五町歩ある。三方に高峯が直立して、一方の平地には千明賢治氏の別荘と養魚所がある。豪壯な建物である。丸沼は緑色の水が非常に清く、幽邃と云ふよりむしろ陰鬱に近い位で、明暗の色彩が神秘的である。沼の東端には、菅沼の水が八町瀧となつて落下するので、風致は仲間面白い。瀧の高さは三百米、熔岩の崖になつてゐる。

菅沼は檜原湖、本栖湖と同様堰止湖である。日光白根が噴火し、その流れ出た熔岩が西北方の谷を堰き止め、こゝに水を湛へるに至つたのである。高さ千七百十米、日光白根・草津白根の火口湖を除けば、これ以上高地の沼は全国に見ない。丸沼より百三米高く、湖岸線は二

里ある。水は濃藍色で、透明度は十九度である。全世界稀に見る透明度三十九度の田澤湖に次ぐものである。水温は夏期表面十八度、冬季は零度に下つて、結氷は十一月中旬より始まる。田中子の談に、

菅沼の冬の面白いのは湖面に張る氷で、厚さ三尺、たき火をしても氷の表面がたどれたやうになるくらゐに過ぎないので、その堅さに驚く。湖水自體の氷はさして厚くなく透明で、いはゆる鏡氷で、その上につもつた雪が凍る。これは色が白くて乳氷といふ。その上に雪解けの水、雨水がたまるとまた鏡氷の層が出来る。この互層は山上の湖水にのみ見る現象である。

とある。海拔高く、冬季温度が著しく低下するので、結氷確實、且長期に亘る。最大深度五十米以上の湖沼が氷るのは、本州中菅沼ある

のみである。

深山無人の境にあるので、まだ多く世に知られぬが、これは日本で珍らしい連珠状湖である。田中子の談に曰く、

「菅沼は丸沼、大尻沼と珠数のようにながつてゐるので、これは信州の青木、中綱、木崎の三湖の外には日本に例も少く、殊にこの連珠状湖は水成岩の地方に多いのが、この三つの沼は火山岩なのでなほさら珍らしく風趣も異なつてゐる。沼田から片品川の谷をさかのぼつて東小川の村に出る、そこから横谷を日光裏山に上ること四里で大尻沼、僅かの川でつないで丸沼、それから瀧のやうな急流の上に菅沼があるわけで、菅沼から二里で金精峠に出てそれから湯本に達する。」と。

菅沼の風光は、他の湖沼とは別種のものである。湖岸の形が、齊整

温雅、而も日光白根を除く外、何れも樹林で蔽はれてゐるので、優婉極りない。水色濃藍、凄艶の氣が充ちて、神仙の境と呼びたい位である。田中子曰く、「山間の湖沼として、風景の幽邃清明なること恐らく全國中で一二を争ふものであらう。」と。

山崎晴治氏上毛山水志に曰く、「若し夫れ三沼を比較するならば、菅沼は魂麗、丸沼は神怪、大尻沼は陰鬱。静寂、幽邃に至つてはひとしく無類である。又三沼の落尻を比較するならば、八町瀧は豪壯、沼合川は清楚、大瀧川は優婉、沼の景趣と全く別種なるものもあるも、考ふれば不思議である。」と。

(2) 尾 瀨 沼

国立公園の候補地尾瀨沼へ行くには、菅沼と同様追

貝から片品川に沿うて上るのである。片品小學校の所より右へ折れずに分れて行くこと八里で、尾瀨峠に達する。峠道は急峻で仲々困難である。頂上に立つて南を望むと、赤城山は美麗な圓錐形を現はすし、その山腹に富士山を併せ見ることが出来る。頂上から北に數町下ると尾瀨沼の畔に出る。

尾瀨沼は上州・岩代兩州に跨る沼で、沼の北西に聳える燧嶽(二二四六米)の噴出した熔岩流の堰止めた一の堰止湖である。海拔一六六〇米、周圍三里四町ある。

水の最大深度は八米五分、透明度は四米三分、水温は表面十七度、深度八米の水底では十六度を示してゐる。

(6)

湯諸の麓山城赤



沼は漂渺際涯なしと形容したい位で、北西の岸に燧嶽のみ、高く天を突いてゐるのみで、西岸一帯の連山は、遠く翠黛を引いてゐる。會津道の通する東岸の森林草原の間には、盛夏の候も石南・菖蒲・かんそ等が咲き、洲には水が打ち上げて、入江の岸を逍遙する様な感がする。北岸の奥沼平を横ぎつて燧嶽の麓に行く間にもいろ／＼の草花が咲き亂れ、若緑の毛氈を布いたやうになつてゐる。

この沼の上は常に水分が非常に多く水も山も皆朦朧としてゐて、不思議な風景である。

西岸尾瀬平は茫漠たる草原で、木立の配置、遠山の高低が、平地に展る緑野を歩く様である。

上毛の三山は何れも天下に誇るに足るものであるが、關東平野の一角を壓して群山を後へに従へ、遙かに富士、筑波と呼應して王城を守るが如く、容姿の雄大を極めて居る赤城は、その中の尤なるものである。

海拔實に六千尺、裾野を遠く十里の外に曳いて悠揚迫らず、坂東太郎に脚下を洗はせて、身は高く雲表に聳え、山容温乎として、威備はる眞男子の骨頂を表徴してゐる。

この山容を嚴父、慈母のやうに、朝夕仰いで人となつた上州男子は弱きを扶けて強きを挫く任侠の血を引いて、處士となつては熱血兒高山彦九郎正之となり、長脇差となつては、體を張つて伊達を賣る俠骨、

大前田英五郎、國定忠治となつた。

大前田英五郎は南麓大胡町の産、國定忠治は東麓國定村の産で、共にこの大赤城から滴り落つる水を呑んで、義膽を鍊り上げた龍虎である。殊に忠治が窮民の爲を思ふの餘り、却つて世を狭くして、遂にあの悲壯な赤城籠りをするの已むなくなつた一節は、最後に近い幕として、誰でも知つて居る所であらう。

山は前橋から五里の緩やかな坂で、頂きには幽邃な傳説にゆかしい大沼、小沼があり、千古の翠底深く湛へて、蛇體だと傳へられる主とこしへに藏してゐる。中納言家の深窓に人となつた手弱女が、故あつて上野の國主に養はれてゐる中、奸惡暴戾のいけにえとなるのを怒

つて、龍神の袖にすがり、奈落の神殿に花の姿をかくした。月は明るく、星はまばらに、夜氣静まつて、小鳥が島のあたり夜霧ひそくと忍びよる頃、眠つてゐる湖の岸に立つて耳をすますと、底の神殿に奏でる神曲が松籟に交つて、かすかに聞えると言ふことである。

盛夏の候、天帝怒つてか、雨を降さず、上州の水田が忽にして生氣を断たんとする時には、周圍の百姓はこの主に祈つて水を頂いて歸るのである。山頂に籠つてゐる黒雲は、さゝやかな同族が下界に下るのを惜んで、一目散に馳せ下りる雨乞ひの使者の後を慕つて舞下り、その爲に沛然として雨降るのだと信ぜられてゐる。

この大赤城を中心としても、澤山の鑛泉が湧いてゐる。即ち西の方

利根川に沿うて病後衰弱・貧血症にいゝ八崎鑛泉から、この山中の地藏鑛泉・湯の澤鑛泉、東南に金山、北へまはつて神土・ラヂウム、足尾線に沿うて神梅鑛泉・梨木鑛泉、更に南に隔てゝ藪塚鑛泉・西長岡鑛泉がある。

これ等を各説く前に赤城山に就いて探つて見ることとする。

(一) 赤 城 山 (上毛山水志参考)

(1) 總 説 北から南に走つて、上野下野の國境をなしてゐる日

光火山群が、忽然その西方に崛起せしめたのが赤城山である。南は直

に平野になり、北は大きい片品谷を生んで武尊連峯と相對してゐる。山は勢多利根兩郡に跨つて、地域は凡東西廿七基米、南北二十基米、黒檜山が最も高く千八百二十三米、威容上毛山河の王者たるの觀がある。

標式的二重式消火山で、舊火口二個あるが、一は缺損し、他は大沼が之を浸した。中心火口丘は大沼の東南に聳ゆる地藏ヶ嶽（一六七三米）、火口原湖は大沼、火口瀬は沼尾川、外輪山は黒檜山・駒ヶ岳・五輪岳・荒山等である。大沼の西に鈴ヶ嶽（一五六四米）、荒山（一五七一メートル）の西南に鍋割山、黒檜山の北に小黒檜山、又南に長七郎山（一五七九米）がある。これ等が山の主峯である。黒檜・地藏・鍋割・荒山・鈴

ヶ岳を赤城の五山と云つてゐる。

長七郎山の東北に小沼がある。これも一の火口湖で、寄生的に噴出した火口に雨水を集めたものである。

赤城山の特色として、第一に指を屈せらるゝのは、その山形である。諸峯が圓錐形であるのは火山の常であるが、全體に於ても亦完全な圓錐形をなしてゐる。殊にその峯から麓に引く緩やかな長い綫條は、優美の感を見る者に與へ、毅然として雲表に聳ゆる形貌は壯嚴雄大である。その裾野が三方に廣潤なのは他に容易に認め難いものである。五峯の對立の完全は秩父方面から見られ、圓錐形の整然たるのは尾瀬峠に立つて見られる。

(2) 大 沼 周圍一里十三町、面積百六十町餘、沿岸は變曲に乏しく、東岸に小鳥ヶ島があつて、岸を距ること八間、沙洲で連つてゐる。

湖の底部は東岸は砂質で、他は砂礫又は岩石の所が多い。水の最深度は十六米五、水質は頗る清澄、透明度は三米三、結氷は十二月から翌年三月迄あつて、層數尺、赤城の氷として世に名高く、スケート場としても理想的のものである。

沼の景色は實に幽邃なものである。上毛山水志に曰く、「山の水へは峰々が迫つてゐる。さまで大ならぬ沼はこれが爲にいよく狭めらるゝが如く、濃綠色の水は暗然として、永久の静寂を守り、樹林綠葉

を纏へば水は益々濃く、緋の錦を飾ればいよく清く、寂然として一波動かぬ。四邊の峰頭概ね圓錐形を現はすので、冥想を紊す怪奇のあ
るなく、山光水色いやが上に森嚴である。之を黒檜山その他の高峯
より俯視する時は、全形を眼に入れ、深潭に臨むの感あり、又水に近
く、砂岸に立つて眸を放てば、翠綠の樹林直ちに水に浸り、一枝一葉
の倒影も明らかにして、漣波脚下より起り、幽寂の氣心身を領する。
東岸に小鳥ヶ島の浮ぶあり、更に静默、更に幽暗を増し、南岸樹林の
間に赤城神社を祀るあつて、眞に尊く、放牧の牛悠々湖畔に遊ぶあつ
て、眞に畫くべく、歌ふべき景趣である」と。眞にこの通りである。
大沼には主がゐて、五十年目毎にこの主にいけにえを捧げなければ

ならないといふ傳説が残つてゐる。
そのいけにえは見目美はしい少女でなくてはならぬと云はれてゐる。

年は十五六の見目美はしい娘をえらんで、一人夕暗の中に岸邊に立たせて置く。夜もだん／＼近づいて、空の星も光が増して來ると、岸に打ちよせる小波のさゝやかな音はその少女の忍び泣きとも聞え、主の喜びの歌とも聞える。沼の奥から水霧が流れて來て、水の面を一面に包み、そして靜かに岸へ峯へ這ひのほつて來る。拭ひ清めた沼の水の底深くから、麗はしいメロデーがきこえて來る。すると小鳥ヶ島のほとりから、濃い霧の一かたまりが浮き上つて、瞬く間に少女の姿

をかくしてしまふといふのである。

大沼の畔に立つて、濃緑の水を眺めながら、この話を思ひ出すと、幽邃といふよりも凄惨の氣に襲はれる。

(3) 小 沼

小沼は大沼より七十米の高地にある。周圍一里弱、壺の底に水を湛へた様で、景趣も大沼とは大分違ふ。周縁の峯々はむしろ荒涼としてゐて、水は大沼より黒く、陰影が強く神祕的の色が濃く現はれてゐる。この沼にも傳説がある。

赤城の南麓、赤堀に居を構へてゐた豪族赤堀道玄に、その顔は凄くほど美しいたつた一人娘があつた。この娘に小さい時分から二つの不思議があつた。乙女の脊には生れ落ちた時から、蛇の鱗のやうなも

のが附いてゐた。そして毎日日の三時頃、必ず山に向つた一間にこもり、襖も閉して何やらするのであつた。この二つの長い間の謎の解けたのが十七歳のある日のことであつた。

侍女を連れてこの小沼のほとりを通りかかつた時、輿の中に居た乙女は侍女に水の欲しいことを訴へた。侍女は望みのまゝに水を谷底から汲まうと走り出した時、高い峯の陰に黒ずんだ水色の沼が見えた。そして眞晝の日がテラ／＼光つてゐるのに、その高い峯の腰、沼の上には黒雲が浮んでゐるのが目についた。侍女はこれを見たとき、不思議や、全身に水をかけられたやうにゾツとおびえたが、輿の中の乙女は嬉しさうに中から出て、この黒雲をながめながら沼のほとりへ行つて

しまつた、侍女の止めるのも聞かずに。

沼は乙女を待ち、乙女は沼を尋ねてゐたのであつた。水際に坐つて雪の掌に水を掬んで口に含むと、乙女の身は緋の衣のみを残して水中に消えた。と同時にさつきから峯の腰にあつた黒雲が消えた。そして沼の水は鏡のやうに澄んでゐる許であつた。乙女を失つた侍女達は沼を眺めながら泣きわめいたが、情ない波のさゝやきは知らぬと云つた。侍女達は泣く／＼形見の緋の衣をしかと抱いて山を下つた。

一人の侍女の云ふことに、「姫様は龍のお姿になつて水へお沈みなされた」と。

これによつて、漸く長い謎が悉く解けた。娘は小沼の主になる爲に

生れたのであらう。さなくば小沼の主が假りに人の姿を借りて現はれたのであつたらう。

(4) 赤城登山

大沼湖畔は広い原で、所々に白樺の白い肌が滴るばかりの翠蓋を支へる。その下を放牧の牛が肥えきつて悠々と遊んで居る様は、繪に見る瑞西さながらである。軽井澤を發見した外人には、この景色も非常に魅力を持つて居て、漸く俗悪化せんとする軽井澤を捨て、寧ろ原始的なこの山氣の中に夏を避けんとする計畫が進みつゝあると聞いて居る。

この雄大なそして幽邃な、春夏秋冬それ〴〵山所謂登る山としての趣と價值とを十分有する赤城が、何故今迄廣く世の人に知られな

つたらうか。

關八州を脚下に見下す六千尺の黒檜を始めとして、駒ヶ嶽・地藏ヶ嶽・薬師岳・鈴ヶ嶽等のあの雄大さ、ゆかしき傳説をかくし、周圍の翠底深く影して、永久に沈黙を守る大沼の幽邃静寂の趣、千古不伐の大森林、さてはゾロに、スキーに、スケートに、其他四季とり〴〵の趣あるこの山は日本アルプス中の山々にも劣りはせぬに。

「富士は一度登れば澤山だが、この山は幾度登つても倦きない。登れ水登る度に趣が増して来る」といふ言が、人々の口に上るのを聞くやうになつたこの二三年、初夏から秋へかけて、リュツグサツクを負ふた登山者の影が陸續と見えるやうになつて來た。赤城も漸く世に出よ

うとして来たのである。

恐らく世人に広く知らるれば知られる程、登山者が益々増すであらうと思はれるのは、強ちお國自慢でもなからう。

この山の登攀は決して困難でないので、その登山口の如きも幾つもあるが、主なるものを挙げて見よう。

一、小暮道——前橋道

前橋から登る路である。前橋驛下車、市内を通り抜けて上細井へ出て行く。赤城神社迄六里半、七時間位を要する。上細井から上りになつて、二里小暮に達する。それから箕輪、赤城牧場を横切つて一杯清水、新坂峠の險を上りつくすと、やがて左前方に大沼の水を見ることが出来る。沼の岸で道は二條

に分れ、右すれば大洞、赤城神社、猪谷旅館に行き、左すれば沼尻に行き青木旅館がある。

此處より黒檜山へ三十町、地藏岳へ一里である。

二、大胡道

前橋から自動車で大胡町に行つて二里半、自動車五十錢、こゝから上り初め、一里にして三夜澤、こゝから輕井澤峠、小沼平、八丁峠を通つて大洞に着く。大胡から五里、五時間位で行ける。

三、水沼道

足尾線水沼驛に下車して上る道である。これが最も便利がよく、三里、三時間行程である。この道なら女や子供でも易々たるものである。水沼から鳥居峠を越えて大洞に達する。

四、上神梅道——梨本道

足尾線上神梅驛に下車して西に向ひ、一里で梨木鑛泉に達する。こゝから上り、茶木畑峠を越え、小沼を右に見て八丁峠から大洞へ行く。四里、四時間餘を要する。鑛泉に浸りながら行くにはよい。

五、八崎道——澁川道

上越南線澁川驛下車、これから利根川を渡つて八崎に出、六道辻からウバゴ峠を越えて、前橋からの道に合する。澁川から五里である。

その他上越南線敷島驛下車、これから四里上る敷島道、沼田から裏山を上る五里の道もある。何れも道路はよくて少しの危険もなく、それ／＼異つた面白味を持つて居る。女や子供でも大した困難はない道である。

である。

山頂大沼の沿岸に、猪谷、青木の二旅館がある。一日二圓位で、何不自由なく宿泊出来る。冬のスキーにはジャンプ臺の設備まであり、スケートには角満淵リンクがあり、夏はキャンピング場としても好適である。四時趣がたへない。

(二) 梨木鑛泉

(1) 交通

實業界古河王國の弗箱足尾は、渡良瀬川の水源に迄くある。ここへ行く足尾線は桐生から發して、渡良瀬の谷を上つて行

く。梨木は桐生から神梅驛まで四十六分、それから一里の間、馬車、馬、駕籠があるが、手荷物を人夫に頼んで、歩く方が面白い。

(2) 旅 館

旅館は梨木館一軒であるが、客室七十六も備へた宏壯な旅館である。入浴料一日十錢、宿料一泊二十錢、この外に、食事は注文に従つて調へる。一切を宿に任せれば一泊一圓五十錢から二圓位である。

(3) 泉 質

湯は無色清澄、微に鹹味を帯び、呑めば少し口を刺戟する。呑んでよく、浴してよい。

内用すれば胃弱と便秘に利き、浴すれば慢性のカタル・婦人病・瘰癧呼吸器等に効がある。

(4) 赤城と足尾

赤城登りは、ここからするのが最も近い。六千尺の高峯に上つて、全關東を俯瞰するのも易々たる業である。

足尾へは上三時間、下二時間の行程で、最終驛を間藤と言ふ。鑛毒問題、労働争議と聞けば血なまぐさい。荒くれた鑛夫、よろけの話は陰惨である。堅抗三千尺、落ちれば地獄、日の目見ずの暗がり、カテラ提げての金掘作業に、詩味のあるわけもないが、鑛烟にむせて一莖の緑もなく、満山磊々たる石塊の中に惨苦に生きる人達の生活は近代に生きるものの義務としても、見て置く必要があらう。銅貨がなければ、はがき一枚、煙草一袋買ふことが出来ぬとあるからは、我等の生活は、この坑の底にタガネを振ふ人達の脂と汗で購はれて居るわ

けである。殊にその様な荒涼の世界の導きとしては、赤城の裏邊、渡良瀬の河沿ひは何と美しい姿であらう。足尾に汽車を捨て、峠を越えれば、日光中禪寺湖畔へ出られる。僅か半日の行程である。

(三) 藪塚 鑛 泉

(1) 交 通

足尾線桐生驛の一つ先は相生驛で、こゝは東武線相生支線の接続地である。こゝから太田行に乗換えると、十八分で藪塚驛に着く。此處に下車して東へ七町、夏は緑の波、秋は黄金の波さわぐ田圃を越えて行くと、松林の下に藪塚鑛泉がある。南へ十六町、俣

か自動車で、坦々たる道を心地好き許り走らせれば、二十分にして西長岡鑛泉がある。何れも東武線によつて大發展をした湯である。

淺草——藪塚迄

三時間

一圓八十七錢

高崎——伊勢崎東武線乗換——太田相生行乗換——藪塚

二時間半

六十八錢

高崎方面よりは、岩宿驛に下車すれば、それより一里、俣もあり徒歩でも樂である。

小山方面よりは、桐生驛で足尾線に乗換へ、相生驛で太田行に乗換へても宜しい。又相生驛下車、自動車で東武線新桐生驛に行つて乗つてもよい。時間はこの方が却て都合よからう。

(2)

旅館・泉質

旅館數軒、何れも設備よく、一泊一圓五十錢より三

圓位迄で十分に居られる。交通便利のため、物價も廉く、滞在等も比較的廉く出来る。

特効は皮膚病一切・火傷・痔疾・痛風・脚氣・疝氣・寸白・リウマチス・婦人病等にある。皮膚病に特効があるとは云つても、草津等の如く泉質が激性でない。腫物・濕疹等の出来る體質の者に特によく、虚弱の人、子供の蟲氣等にもよい。

藪塚、西長岡共に交通至便、平地で往復に困難等のことが少しもないから、容易な療養地として、婦人子供の浴客が可なりに多い。

(四) 西長岡鑛泉

(1) 平野の湯

藪塚鑛泉と相隔つること十數町、同じく、桑園と稻田と相續く平野の中に脊中合せをしてゐる。上毛の温泉のすべてが、深い山の中にあるのに、この二湯のみは、關東平野の一隅に広い田圃と人里に圍まれて、春夏秋冬多くの客を集めてゐる。これがこの二湯の特色と云つて宜からう。

遠く秩父の連山を眺め、赤城の雄大、妙義の奇、榛名の温泉を、朝夕異つた色、かはれる趣で眺められるけれど、近い山といふものは、

低い金山のみで、全く平野の湯である。

田山花袋氏が「平野の中ながら如何にも温泉に來た様な氣分に浸れる。」とその温泉遊覽の中に書いて居るが、一寸面白い氣分の所である。

(2) 交通

藪塚鑛泉と同様藪塚驛下車、南へ十六町、俣があり自動車があり、徒歩でも少しも苦はない。太田驛で乗換へず下車、子の育の吞龍様に參詣して來ても一里強である。交通は至便である。

(3) 旅館・泉質

旅館は長生館一軒であるが、客室八十餘を備へて設備完全、仲々清潔で氣持がよい。宿料等は藪塚鑛泉と同一組合であるから、略同様である。

鑛泉は内用浴用共によく、痛風・糖尿病・婦人病・膽石・胃腸病等に

特効がある。

(4) 湯の氣分

全く平野の湯であるから、深い山の中にある湯と異つて、登るべき山もなく、見るべき瀧も岩もない。けれ共見渡す限り平々坦々、宿より一步踏み出せば、田があり畑があり、居ながらにして蛙の聲を聞くことも出来れば、若い田舎娘の鄙びた、然し味のある美しい唄を聞くことも出来る。そこに情味掬すべきものがあるのである。宿の欄干に倚つて眸を放てば、遠く上毛三山、秩父の連山などを望むばかりで、その間何物の目を遮るなく、廣い田圃と畑の中に、處々一かたまりの家と、人なつかしい森とがあるのみだ。朝に夕に鄙びた言葉を聞き、廣茫千里といったやうな平野を眺めながら、湯に浸

るのは、實にゆつたりして、田園生活を營んで居る気分になれる。この暢びくした所に、平野の湯の特色はあるのだ。

(5) 附近の名勝

この兩嶺泉から一里許り南にある、丘かと思える

松に覆はれた山は、小山ながら、國史上に没し難い幾頁かを占有してゐる金山である。南朝の忠臣新田左中將義貞の城址がある。元弘の變には、赤城風に吹きなびく中黒の義旗の下に馳せ集つた上州男子は、利根の流を亂して押渡つて、相武の天地を席卷し、一擧賊の巢窟を屠つた。彼の黄金作りの太刀を海神に捧げて、稻村ヶ崎を走り、奇勝を博した勇將の故地はこゝである。一時間あれば樂に上れる美しい山で頂上の眺めもよい。晴れた日には、利根、渡瀬の流や、富士も筑波

も一眸の中に收められる。

元弘の折、左中將が始めて旗擧げをした生品神社も直ぐ近くにある。

太平記によつて、彼の忠魂義膽に感激した寛政の奇士、高山彦九郎正之、三條の橋にひれ伏して、「落つる涙は加茂の水」と俗謡にまで唄はれた熱血兒、一劍天下を行く義士を尋ねて、時事を談ずるも時未だ利あらず、滿腔の鬱懷やるに由なく、慷慨の氣晴すに機なく、世の行末も不知火の筑紫の果に、空しく劍に伏した勤王の志士、仲禮の英魂が永へに眠る高山神社は、この金山の南麓である。

こゝに又子育吞龍の名も高い靈場として、參詣者の四時絶えること

のない淨土宗十八壇林の大刹大光院がある。本年四月 久邇宮殿下

【附 録】

各 温 泉 分 析 表

(1) 伊・香・保・温・泉

硫酸カルシウム	硫酸ナトリウム	硫酸カリウム	固形物總量	比重 (攝氏一五度にて)	煮沸後	(種別)	(飲湯)		
							帶黃白色結晶性物質を析出し反應弱アルカリ性	同	上
〇、二七六八六	〇、一〇〇六七	〇、〇二二〇一	〇、九五八六五	一、〇〇〇八〇	同	(鐵葉湯)	同	上	同
〇、三六九一四	〇、二九一〇一	〇、〇一六七九	一、三四一八五	一、〇〇二〇一	同	(大堰湯)	同	上	上
〇、一七九七一	〇、一六一五八	〇、〇二〇一六	〇、九七五二〇	一、〇〇〇七七	同				

の台臨があり、上下貴賤の別なく、全國到る所に崇信者を持つてゐる。

藪塚、西長岡へ来た人は、必ず訪れて行く地である。

夜半の雪に春まだ浅き山谷の

出湯のけぶり埋れたるかな

花 袋

|| なばり ||

(2)

草津温泉

定量分析 本水每千分中に含有する各成分の分量

硫酸アルミニウム	一、〇六五一	硫酸第一鉄	〇、三一〇七
磷酸アルミニウム	〇、〇一〇二	鹽化マグネシウム	〇、一二七九
鹽化カルシウム	〇、二七六三	鹽化ナトリウム	〇、〇九三二
鹽化カリウム	〇、〇三二五	鹽化アムモニウム	〇、〇〇三一
珪酸	〇、二四九八	硼酸	〇、〇一五〇
遊離硫酸	二、一六七四	遊離鹽酸	〇、三〇八五
硫化水素	〇、〇〇五五		

游離炭酸(立方糖)

臭素 痕跡 同

三五

同

七五

鹽化ナトリウム	〇、〇四六八〇
鹽化マグネシウム	〇、一〇三五五
炭酸ナトリウム	〇、〇八七九三
炭酸カルシウム	〇、一〇一六〇
炭酸マグネシウム	〇、〇〇三〇五
炭酸鉄	〇、〇一五八一
炭酸第一マンガン	〇、〇〇三五六
酸化アルミニウム	〇、〇〇三五六
珪酸	〇、一五九三〇
磷酸	痕跡
硼酸	痕跡
沃素	同
有機物	同
游離及半結合炭酸	〇、七七九八〇

鹽化ナトリウム	〇、一〇五五三
鹽化マグネシウム	〇、一二七〇六
炭酸ナトリウム	〇、〇八七九三
炭酸カルシウム	〇、二一八一三
炭酸マグネシウム	〇、〇〇九六四
炭酸鉄	〇、〇一三六四
炭酸第一マンガン	〇、〇〇四二〇
酸化アルミニウム	痕跡
珪酸	〇、一二五一〇
磷酸	痕跡
硼酸	痕跡
沃素	同
有機物	同
游離及半結合炭酸	〇、二〇三七七
鹽化ナトリウム	〇、一六一八〇
鹽化マグネシウム	〇、一一一七八
炭酸ナトリウム	〇、〇三九三八
炭酸カルシウム	〇、一八四五二
炭酸マグネシウム	〇、〇〇三二六
炭酸鉄	〇、〇一五一〇
炭酸第一マンガン	〇、〇〇三〇六
酸化アルミニウム	〇、〇〇二〇〇
珪酸	〇、一五四五九
磷酸	痕跡
硼酸	痕跡
沃素	同
有機物	同
游離及半結合炭酸	〇、二五二八二

(3) 四・萬・温・泉

鹽類泉に屬し温度華氏一六〇度乃至一八三度、無色透明無臭で弱鹹味あり、反應アルカリ性。

鹽化ナトリウム	一、四八九一	硫酸ナトリウム	〇、一一三七
鹽化カリウム	〇、一三四九	珪酸	〇、一三七三
鹽化マグネシウム	〇、〇二一〇	鐵	痕跡
硫酸カルシウム	〇、五八六五		

(4) 河・原・湯・温・泉

鹽化ナトリウム	〇、六〇九〇	珪酸	〇、〇六〇〇
硫酸カルシウム	一、〇三六〇	硫酸水素	〇、〇〇九三
硫酸アルミニウム	痕跡	固形物總量	一、七四六三

(5) 澤・渡・温・泉

無色清澄で微鹹を帯び硫化水素臭を有し、反應はアルカリを呈し、温度は華氏の百〇二度より百二十七度に至る。源泉一立中に含有する固形物全量を次の表に示す。

鹽化ナトリウム	一、二二八九	磷酸	〇、一七三三
硫酸カルシウム	〇、四七一六	硫化水素	〇、〇二五五
硫酸マグネシウム	〇、二五一一	鹽化カリウム	〇、〇九二七
硫酸アルミニウム	〇、〇三七五	硫酸ナトリウム	〇、四一四二
硫酸第一鐵	〇、〇一六六	有機質	痕跡
珪酸	〇、〇二一四		

(6) 鹿・澤・温・泉

炭酸泉で、微に蛋白石濁を呈し、殆んど異臭味なく、弱アルカリ性反應を足

(9)

川・中・温・泉

鹽化ナトリウム 〇、四六七二
 硫酸マグネシウム 〇、二四四二
 硫酸第一鐵 〇、二二六〇

硫酸ナトリウム 〇、四一三四
 硫酸アルミニウム 〇、三三〇〇
 硫酸カルシウム 〇、〇六二〇

(8)

鳩ノ湯温泉

鹽化ナトリウム 一、〇一三五
 硫酸カリウム 〇、〇五二一
 硫酸ナトリウム 〇、一四〇一
 鹽化マグネシウム 〇、〇八一二
 硫酸カルシウム 一、二一三四

重炭酸マグネシウム 〇、一二四六
 珪酸 〇、一一一六
 游离炭酸 〇、〇三九三
 固形物總量 二、六三〇〇

硫酸マグネシウム

〇、一一四三

磷

酸 痕

跡

(7)

萬座温泉

鹽化ナトリウム 〇、二一六〇
 硫酸ナトリウム 〇、〇四七九
 鹽化カリウム 〇、〇三九六
 硫酸カリウム 〇、二一六七

硫酸第一鐵 〇、〇二〇四
 珪酸 〇、〇九六五
 游离硫酸 〇、一二三九
 硫化水素 〇、〇五二七

鹽化カリウム 〇、〇三五三
 鹽化ナトリウム 〇、〇三五六
 硫酸カルシウム 〇、〇〇二二
 重炭酸ナトリウム 〇、七二一六
 重炭酸カルシウム 〇、三六二六

重炭酸マグネシウム 〇、四四〇三
 珪酸 〇、二四五三
 アルミニウム 痕
 鐵 痕
 合計 一、八四二九

する。攝氏十五度に於ける比重は一・〇〇二、其の一瓦中の固形物の總量約〇、九一六三瓦。本泉一立中に含有する主要成分の瓦量を次に示す。

(12)

法 師 温 泉

硫酸カルシウム	〇、九九四五
鹽化ナトリウム	〇、二五五五
硫酸カリウム	〇、〇一八一
硫酸ナトリウム	〇、〇〇五〇

硫酸マグネシウム	痕
珪酸	〇、〇三四〇
磷	痕
酸	跡

(11)

湯 原 温 泉

鹽化ナトリウム	〇、三〇一七
硫酸ナトリウム	〇、一六三二
硫酸カリウム	〇、〇一〇七
硫酸カルシウム	一、一四〇一
硼酸ナトリウム	〇、〇二四四

マグネシウム	僅
酸化鐵	〇、〇〇四〇
礬	〇、〇三九九
珪酸	僅
磷	微

(10)

谷 川 温 泉

有機質	〇、二一七〇
酸	〇、〇三二一
痕跡	
珪	

無色清透（ひよくせいとう）で異臭味（いしゅうみ）あり、中性反應（ちゅうせいはんおう）を呈し、之を煮沸（しやふつ）すると弱アルカリ性（じやくアルカリせい）を足する。比重（ひぢゆう）攝氏五十五度（ど）に於て一、〇〇一（しゆ）を示す。温泉千分中（りんせんぶんちゆう）に含有する固形物（けいぶつ）の總量（そうりやう）は〇、九六九〇分（ぶん）で成分（せいぶん）を次に示す。

鹽化ナトリウム	〇、一三七四
炭酸ナトリウム	〇、〇六七一
鹽化カリウム	〇、〇〇五七
硫酸カルシウム	〇、六七三四
鹽化マグネシウム	〇、〇〇四三
珪酸	〇、〇一〇〇
アムモニア	微
游離及び結合炭酸	同
量	量

(13) 老 神 温 泉

硫酸カルシウム	〇、九九四五	硫酸マグネシウム	痕
鹽化ナトリウム	〇、二五五五	珪 酸	〇、〇三四〇
硫酸カリウム	〇、〇一八一	酸 痕	
硫酸ナトリウム	〇、〇〇五〇	磷 酸 痕	跡

(14) 湯 宿 温 泉

無色清澄で、殆ど中性の反應を呈し、千分中に含有する固形物 一、四二三〇
 本泉は弱鹽類泉に屬する。

鹽化カリウム	〇、〇二三三	硫酸ナトリウム	〇、六四一一
重炭酸第一鐵	〇、〇〇一二	珪 酸	〇、〇六〇九
重炭酸カルシウム	〇、〇八四九	硫酸カルシウム	〇、四八七一

(15) 磯 部 鑛 泉

無色清澄にして稍々多量の沈澱物がある。鹹味を具へ、微弱アルカリ性反應を呈し、比重は攝氏一〇度に於て一、〇二四九を示す。本水千分中に含有する固形物總量二六、九一四〇分で、各成分の量は次の通である。本水は食鹽アルカリ性炭酸泉に屬する。

鹽化ナトリウム	二一、三五三七	重炭酸第一鐵	〇、〇一三〇
鹽化カリウム	〇、二七三五	臭化ナトリウム	〇、〇一四六
重炭酸ナトリウム	三、七二九三	沃化ナトリウム	〇、〇〇二四
重炭酸カルシウム	一、〇八九六	鹽化アムモニウム	〇、〇〇七五
重炭酸マグネシウム	五、三五九一	珪 酸	〇、〇二二八

(18)

梨 木 鑛 泉

無色清澄で、極めて微に鹹味を具へ、且つ少しく口中を戟刺し其反應弱酸性を呈するが、之を煮沸すれば微に混濁してアルカリ性に變ず。比重は攝氏十五度に於て一・〇〇二を示し、其の毎千分中に含有する固形物總量は約二

固形物總量	八〇、八八八	主要成分は次表の通り。	
鹽 素	〇、一〇六五	カ リ ウ ム	〇、〇三八九
珪 酸	〇、〇七五〇	カ ル シ ウ ム	〇、〇三九〇
ナ ト リ ウ ム	〇、三五六六	鐵	〇、〇〇八〇
マ グ ネ シ ウ ム	〇、〇〇五二	磷 化 鐵	〇、〇〇八〇
ア ル ミ ウ ム	〇、〇〇二〇	硫 化 水 素	痕 痕
硫 酸	〇、〇五八四	遊 離 炭 酸	〇、〇七九六九

(17)

西 長 岡 鑛 泉

弱アルカリ泉に屬し、無色透明で微に硫化水素臭あり、味は微甘、灰汁様で一立中の含有炭酸量は總計〇、四二六、含有鹽類量は總計一、一八三七

炭酸ナトリウム	〇、一五四一〇	硫酸ナトリウム	〇、〇〇五一〇
炭酸カリウム	〇、〇八六五〇	鐵 化	〇、〇〇三一五
炭酸カルシウム	〇、〇〇八七〇	珪 酸	〇、〇〇五七〇
炭酸マグネシウム	痕 跡	遊 離 炭 酸	〇、〇七九六九

(16)

藪 塚 鑛 泉

本鑛泉一立中の量は次表の様である。

硼 酸	〇、九九七〇	遊 離 炭 酸	二、四一五八
-----	--------	---------	--------

鹽化ナトリウム	〇、二二八四	重炭酸第一鐵	〇、〇〇二二
鹽化カリウム	〇、〇〇八六	鹽化アムモニウム	〇、〇〇八四
鹽化カルシウム	〇、〇〇五五	珪酸	〇、〇八八三
硫酸カルシウム	〇、〇八九二	硼酸	〇、〇八八三
重炭酸カルシウム	〇、〇九七〇	游離炭酸	〇、〇四五四
重炭酸マグネシウム	〇、〇〇一三		

附録終

(19)

湯 檜 會 温 泉

無色清澄、無臭の鹽類泉にして千分中に含有する固形物總量〇、五分、各成分の量は、

鹽化ナトリウム	一、〇七七〇	酸 化	〇、〇一〇〇
鹽化カリウム	〇、一〇六四	酸化アルミニウム	〇、〇〇三〇
鹽化カルシウム	〇、三三四一	珪酸	〇、〇九九八
鹽化マグネシウム	〇、〇一四七	硼酸	痕 跡
炭酸マグネシウム	〇、四七四七	磷酸	痕 跡
硫酸カルシウム	〇、〇三二二	游離及半結合炭酸	〇、〇五二一

二五〇六分で各成分の含量は次の表の通り。本泉は食鹽を含める炭酸泉に屬する。

卷末小言

富豪の蔵する雪舟の山水も、説く人の如何によつては五金にも價せず、オランダ焼の小皿も幾錢の灰吹皿とより見られぬことが、往々にしてある。

温泉王國を以て誇るわが群馬縣の温泉も、その道の大家に靈筆を振つて記述されるれば、名湯の名湯たる面目が躍如たるものを、文を記すことなどに素養も、修練も少ない私如きが之を敢てしては、オランダ焼を灰吹皿に見られるの類になりはせぬかとそれをのみ恐れてゐた。

しかし五金に値附けられても、雪舟はあくまで雪舟である。灰吹皿になつてもオランダ焼はごこまでもオランダ焼である。誰が記述して紹介

しても、名湯は依然名湯である。敢へて私が身の程も知らず、編纂の任に當つた所以である。

小さい時から私は、よく温泉に連れて行かれた。そして其の後伊香保・四萬・那須・鹽原の諸温泉へ幾度か行つて英氣を養つた。人いきれのする程賑やかな夏の夜、流しの新内の三味の音にうつとりと聞き惚れた湯の町の情調、橙色の夕空を欄干によつて眺めながら、淡い旅愁にひたる温泉は、まことになつかしいものゝ一つである。これも私に筆をとらしたものの一つである。

いくら温泉に行つたからとて、書くことの出来ないものに、たとひ貧弱でも一の冊子に纏まる筈はない。それがこんなものに纏つたのは自分

伊香保温泉

- ◎伊香保温泉は 海拔三千尺、空氣清澄、風光絶佳、山水の雅景に富む
- ◎伊香保温泉は 含鐵炭酸泉にして泉量豊富、諸病に特效あり
- ◎伊香保温泉は 遊覽地として他に比類なし、探勝すべき勝地頗る多し
- ◎伊香保温泉は 無二の行樂地、交通至便、春夏秋冬風致たゆることなし
- ◎伊香保温泉は 上越南線澁川驛下車、電車五十分自動車廿分

の力ではない。皆先輩畏友の方々の力によつて出来たのである。森田保次氏には最も大きい助力を仰いだ。鈴木勇次郎氏よりは文の削正を、齊藤警察部長、玉木衛生課長の兩上司よりは不斷の鞭撻と援助とを賜つた。厚く感謝してやまない。そして本書の不備の點は、讀者諸賢の御示教を仰いで、温泉王國の寶の紹介として出来るだけ立派なものに補遺したいと考へてゐる。

終りにこの書の刊行の趣旨に賛して、快く出版を引受けられた風間慶文堂主の好意に厚く謝意を表する。

大正十五年七月

編者 しろす

天下の
奇勝 妙義山の登山口の定期自動車の便あり

日本一

交通至便なる温泉
信越線磯驛より
二丁
無類の蜃気楼出現
一ヶ月數回、詳
細照會

温泉旅館

イソベカン
電話五番
長壽館
電話十五番

日本一

食鹽アルカリ性
炭酸泉
胃腸病
の
名湯
神経痛

上州磯部

鳳來館
電話三番
林屋
電話十番

鹿 澤 溫 泉

- 土地高燥眺望雄大
- 海拔四千五百尺極暑七十五度ヲ超エザル好避暑地
- 學生ノ勉強ニ好適
- 泉質ハ炭酸泉 胃腸病 腦病ニ奇効アリ
- 信越線上田驛及草津電鐵驛戀驛ヨリ乗合自動車アリ
- 御一報次第案内記呈上

上州吾妻郡嬭戀村

鹿澤溫泉組合

上 州 澤 渡 溫 泉

湯 元

ま る ほ ん

福 田 六 右 衛 門

◎◎ 眺望絶佳
◎◎ 客室清潔

◎◎ 取扱親切
◎◎ 料低廉

上 州 草 津 温 泉

◎ 病魔退治 健康増進
に當溫泉をお勧めします

◎ 順路 信越線輕井澤驛より草津電鐵にて

◎ 特効 胃腸病 糖尿病 脊髄病 婦人病
神経痛 レウマチス 皮膚病 腦病

湯 檜 曾 溫 泉

山紫水明
遊覽療養
避暑
スキー
絶好の地
上越線の
開通に依
り交通至
便新進の
温泉

上 州 利 根 郡

林 湯 の 本 家 旅 館
屋 旅 館

春 夏 秋 冬

の 行 樂 地

草 津 温 泉

ゆ き

電 車 全 通

信 越 線

輕 井 澤 驛 乘 換

草 津 電 氣 鐵 道

長 野 縣 輕 井 澤 町

電 話 輕 井 澤 「長」 四 一 番

鹿 澤 温 泉

- ◇ 海拔五千尺 眺望雄大
- ◇ 避暑地 スキー 療養地 として好適
- ◇ 紅葉館スキー場
- キヤンピング場あり
- ◇ 信越線田中驛より四里
- 滋野驛より二里半
- ◇ 御一報次第案内記送呈

鹿澤温泉元湯
雲井の湯開祖
旅館 紅葉館

澤 渡 温 泉

◎ 山水美にして眺望絶佳

◎ 避暑療養寒湯治に絶好

◎ 婦人病、生殖器諸病、皮膚病

痔疾に奇効あり

旅 館

まるほん 福田六右衛門

萬 や 田村秋三郎

新叶や 關 新 平

西長岡鑛泉

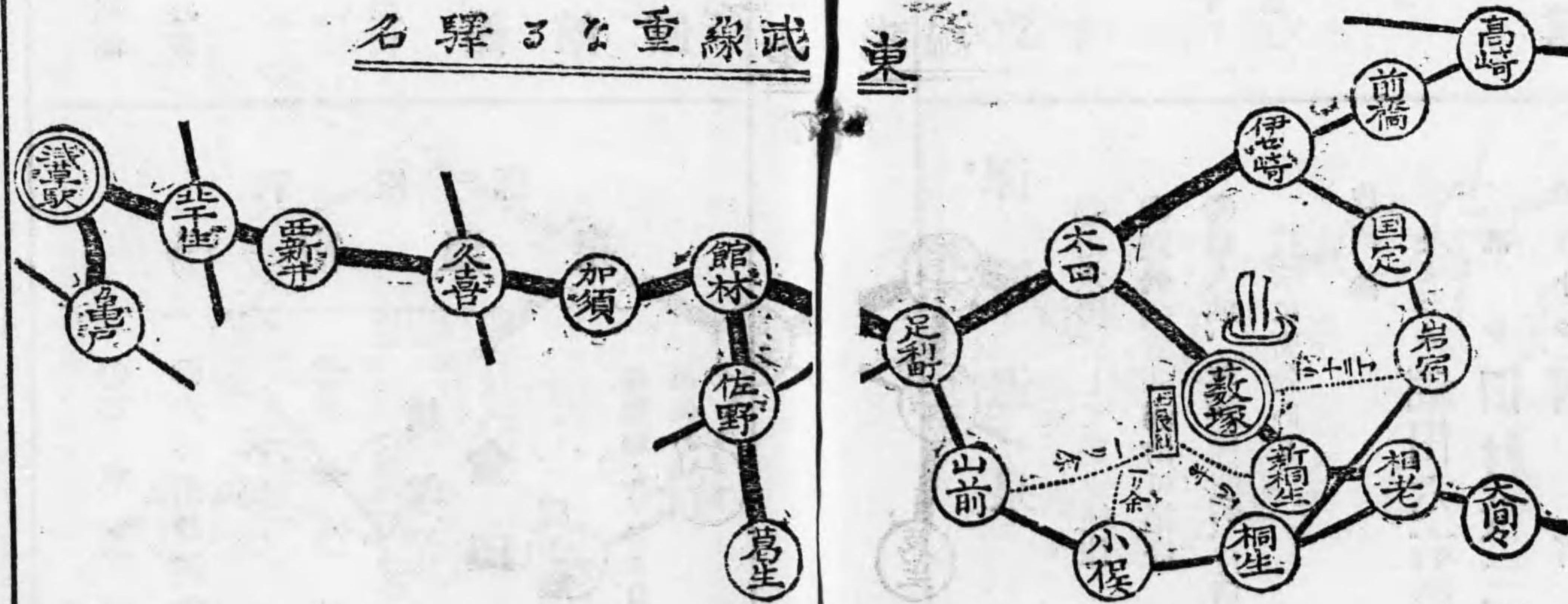
西長岡	同	同	同	同	藪塚
電話五 四九番	長生館	室田館	今井館	伏島館	藪塚館
					福壽館

上州藪塚及

上州の温泉場で
東京から
一番近く
一番便利よく
一番効能がある
一番町で
一番宿料の安い
民衆的療養地で
す
太田香龍より汽
車程二十分にて
達す

武重線各駅名

東



利根郡 湯原温泉

◎山紫水明風景絶佳

◎療養避暑遊覽の好

適地

◎上越線開通

交通至便

旅館
古屋旅館
大正館
藤屋旅館

利根郡 湯宿温泉

◎空氣清鮮

◎赤谷川の溪谷

美絶佳

◎卓効無比

旅館

金田屋

岡田熊次郎

後閑驛より二里自動車の便あり

奥上州天與の靈泉

法師温泉 長壽館

群馬縣利根郡新治村

◎海拔二千八百尺、空氣清涼、幽靜避暑好適の別天地

◎泉質清澄透明湧出量、豐富ラジウム含有、腦神経系統疾患、婦人病一切、胃腸病、リウマチス、不妊症に特効あり

◎附近に三國權現、三坂峠、大盤若塚、戊申役古戰場、魚返瀧太源太山等の舊蹟勝地あり。珍鳥佛法僧棲息し葦類高山植物等多く夏の新緑と秋の紅葉は共に特に趣あり

◎營利と社會奉仕の併行を信條とし親切を主義とす

◎上越南線沼田驛より湯宿迄自動車湯宿より馬車及駄馬の便あり

赤城山麓
梨木温泉

◎胃病 神経痛 婦人病に奇効あり

◎赤城登山の近道

◎附近に湯本八景 赤城名勝其他

古蹟名勝多し

◎足尾線上神梅驛より一里

湯元
梨木館

大正十五年八月三十日發行

印刷行

上毛の温泉

定價金一圓也



著作者

群馬縣衛生協會
群馬縣温泉振興調查會

代表者 林 豊

發行者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
風間 成五

印刷者 東京市神田區表神保町七番地
下川 隆博

發行所

東京市神田區錦町一ノ十九番
電話神區25一四七〇番

慶文堂書店

平凡社印刷所印行

慶文堂のプレゼント叢書

高田 徳佐先生著	子供達への プレゼント	近世科學の寶船	定價金二圓八十錢 送料金二十二錢
吉田 辰次先生著	子供達への プレゼント	歴史に 名高い 歌 物 語	定價金一圓七十錢 送料金十八錢
吉田 辰次先生著	子供達への プレゼント	文學書 に咲く 物 語 の 花	定價金一圓八十錢 送料金十八錢
田村 明一先生著	子供達への プレゼント	ペンタ の 月 世界 旅行	定價金一圓五十錢 送料金十八錢
益田 道三先生著	子供達への プレゼント	世界に 名高い 戲 曲 物 語 集	定價金一圓八十錢 送料金十八錢
西澤勇志智先生著	子供達への プレゼント	最新 化學 炭 素 太 閤 記	定價金一圓八十錢 送料金十八錢
富永 堅吾先生著	子供達への プレゼント	劍 道 達人 腕 比 べ	定價金一圓八十錢 送料金十八錢

校學女・校學中
書備準驗受學入

◎著會育教學小◎

模 擬 試 驗 教 科 及 自 習 用	入 學 試 驗 に 出 た	中 學 校 女 學 校 入 學 試 驗	中 學 校 女 學 校 入 學 試 驗	中 學 校 女 學 校 入 學 試 驗	中 學 校 女 學 校 入 學 試 驗	中 學 校 女 學 校 入 學 試 驗	中 學 校 女 學 校 入 學 試 驗
心 理 試 驗 總 練 習	算 術 難 問 三 百 題	綴 方 學 及 文 例 全 集	地 理 方 學 及 問 題 全 集	國 史 方 學 及 問 題 全 集	理 科 方 學 及 問 題 全 集	尋 常 小 學 讀 本 學 方 び 全 集	算 術 方 學 及 問 題 全 集
定 價 金 十 四 錢	定 價 金 十 四 錢	定 價 金 十 八 錢	定 價 金 十 八 錢	定 價 金 十 八 錢	定 價 金 十 八 錢	定 價 金 一 圓 二 十 錢	定 價 金 一 圓 三 十 錢

吉 田 三 男 也 先 生 著	高 田 德 佐 先 生 著	吉 田 辰 次 先 生 著	吉 田 辰 次 先 生 著	岸 谷 貞 次 郎 先 生 著	岸 谷 貞 次 郎 先 生 著	吉 田 辰 次 先 生 著	白 井 勝 三 先 生 著
子 供 達 へ の プ レ ゼ ン ト	子 供 達 へ の プ レ ゼ ン ト	子 供 達 へ の プ レ ゼ ン ト	子 供 達 へ の プ レ ゼ ン ト	子 供 達 へ の プ レ ゼ ン ト	子 供 達 へ の プ レ ゼ ン ト	子 供 達 へ の プ レ ゼ ン ト	子 供 達 へ の プ レ ゼ ン ト
四 書 の お し へ	私 は 電 氣 で あ り ま す	修 養 講 話 兒 童 鳩 翁 道 話	修 養 講 話 兒 童 幼 學 綱 要	生 物 界 を 溯 る の 記	眼 に 見 え ぬ 生 物 の 世 界	支 那 歷 史 物 語	面 白 い 動 物 の 生 活 ぶ り
近 刊	近 刊	近 刊	近 刊	近 刊	近 刊	近 刊	定 價 金 一 圓 八 十 錢 送 料 金 十 八 錢

慶文堂發行受驗參考書

高田 德佐先生著	受驗參考	答案式	新制	物理學粹	定價金二圓二十錢 送料金十八錢
高田 德佐先生著	受驗參考	答案式	新制	化學粹	定價金一圓九十錢 送料金十八錢
高田 德佐先生著	受驗參考	答案式	新制	物理學粹	定價金一圓七十錢 送料金十六錢
高田 德佐先生著	受驗參考	答案式	新制	化學粹	定價金一圓四十錢 送料金十六錢
中學教育會著	新制	化學	說明	問題解法粹	未定
中學教育會著	新制	物理學	說明	問題解法粹	未定

高田德佐先生校訂 中學教育會著	受驗參考	答案式	物理學粹	定價金一圓五十錢 送料金十四錢
高田德佐先生校訂 中學教育會著	受驗參考	答案式	化學粹	定價金一圓九十錢 送料金十八錢
高田德佐先生校訂 中學教育會著	受驗參考	答案式	物理學粹	定價金一圓四十錢 送料金十四錢
高田德佐先生校訂 中學教育會著	受驗參考	答案式	化學粹	定價金一圓五十錢 送料金十四錢
內藤三介先生著	受驗參考	答案式	和文英譯粹	定價金三圓五十錢 送料金二十八錢
文學士 益田道三 阪本 潔先生共著	入學試驗問題 之語句本位	英文和譯粹		定價金一圓七十錢 送料金二十錢
內藤三介先生校閱 阪本 潔先生著	受驗參考	答案式	英文法粹	定價金二圓也 送料金二十錢

慶文堂發行の最も實際的な體育叢書

高野佐三郎先生序 富永堅吾先生著	渡部正先生共著 高根澤光位	村尾奎介先生著	高根澤光位 渡部正先生共著	關川武一郎先生著
最も實際的な	最も實際的な	最も實際的な	最も實際的な	最も實際的な
學生劍道の粹	學生柔道の粹	學生弓道の粹	遊戯競技の粹	學校體操の粹
定價金一圓九十錢 送料金十八錢	定價金二圓三十錢 送料金二十四錢	近	近	近
刊	刊	刊	刊	刊

◎◎大正時代の活歴史
◎永代不朽の名著

慶文堂書店發行

春海 熊三先生著	私の見た	我	實	へ	山	東
歐米の美術 全	樂多籠 全	業ざんげ 全	そ茶 全	公遺烈 全	都茶會記 第二輯	
定價金三圓二十錢 送料金二十四錢	定價金二圓五十錢 送料金二十四錢	定價金二圓也 送料金二十二錢	定價金五十錢 送料金十四錢	定價金三圓五十錢 送料金二十四錢	定價金二圓五十錢 送料金二十二錢	

庵 箒
高橋義雄先生著

高橋義雄先生著
茶道叢書

乙丑大正茶道記 全	甲子大正茶道記 全	癸亥大正茶道記 全	辛酉大正茶道記 全	大正庚申茶道記 全	東都茶會記 第七輯	東都茶會記 第三輯
定價金四圓五十錢 送料金二十四錢	定價金四圓五十錢 送料金二十四錢	定價金三圓 送料金二十四錢	定價金五圓 送料金二十四錢	定價金五圓八十錢 送料金十四錢	定價金六圓 送料金二十四錢	定價金六圓 送料金二十四錢

550.

90

終